郷土の慈善家　吉田市右衛門宗敏

熊谷学講師　小池幹衛

はじめに

江戸時代末期に活躍した吉田市右衛門宗敏は、初代宗似の「虚費を省き窮民を賑はすを家訓とせよ」という祖訓を守り、勤倹に励み、家財を会計し、三分の一公益に供した。その恩恵を受けた人たちの子孫は今なお、墓参に訪れている。神として、仏として崇められた宗敏は集福寺に葬られ、墓は県文化財に指定されている。

１　吉田家の出自

成田家分限帳（天正十六年：1588）に、ご譜代百五拾貫、吉田紀伊守・四拾貳貫吉田左京とある。天正六年（1578）上杉謙信の逝去後養子三郎景虎と甥景勝の跡目相続の争いが生じ、景虎は成田長泰へ応援を求めた。長泰は病気のため、家臣の吉田紀伊守・江利川左京を旗頭として七騎派遣した。天正七年（1579）御館の乱という。残念ながら越州吉良坂で両人共討死にした。景虎は自害し果てた。

豊臣秀吉の小田原攻撃で、北条氏長を支えた成田氏は、忍城を開城した。その家臣は縁故を頼り、吉田家は兄弟共に四方寺へ土着した。兄勝久をお西、弟六左衛をお東と称した。

お東の六左衛の子宗徳の第四子が下奈良に分家名主となり、初代宗似、二代宗敬、三代宗敏、四代宗親、五代宗戴と称し代々市右衛門を名乗った。各代それぞれ特色のある活動をして社会に貢献したが、誌面の都合上三代宗敏の概略を述べる。

２　宗敏の生いたち

父宗敏は妻子を失い、後妻との間に男子が生まれた。この人が宗敏である。父宗敬は三代目にふさわしく厳しい鍛え方をした。四・五歳から詩経論語の素読、寺小屋時代は木綿の着物・藁草履で足袋は許されず、六・七歳は使用人と大八車で樽集めに従事した。

吉田市右衛門宗敏像

３　宗敏の事績～主なもの～

①文化十年（1813）

幕府に千五百両上納し、その利息で熊谷近郊の加助郷に苦しむ農民を救済した。

②文化九年（1812）

文化元年以来自製酒十樽を年々冥加金として上納していらが、この年から二十樽を上納した。こ

れにより下賜された白銀二二六枚で土地を購入し、その作徳金で
・貧民で子を産む者に年一両二分、産後母死せる者に年三両、五歳まで与えた。
・棄児は相当の金額で乳ある者に託した。確実な希望のある者に若干の手当金を出し養女とした。
・憚りある者は他聞せぬよう充分配慮を重ねた。
③文化十二年（1815）
　四方寺・下奈良・日向の貧民授産資金千両を上納したが許されず、その金で江戸に土地を購入した。年五分の地徳で貧民四十七戸に十～二十両を給し田畑を購入させた。その面積八町七反七畝にも達した。
④文政八年（1825）
　利根川堤防決壊により群馬県邑楽郡十四ヶ村を救済した。十五歳以上男女へ1日大麦二升又はその代金を与え、一九０町一反六畝五歩（石高千五百石）を開墾した。流失潰家へは家作料、窮民三八八人へは扶養大麦六斗入三八八俵、桑苗四万本、榛苗十万本を与えた。
　領主館林藩は救済できず、領地替えを願い幕僚となった。代官は宗敬に救済を求めた。この挙を聞き、親戚の羽生清水弥右衛門は義援金数百両を拠出してくれた。村民は本居太平撰文の威徳碑（万葉仮名）を南大島へ、幕臣筒井紀伊守清憲撰文の威徳碑（通称奈良石）を須賀利根堤防上に建立した。須賀宥泉寺では盆の折「長谷川雪旦画」宗敏の画像を掲げ、奈良の集福寺へは墓参りなど、今日も続けられその遺徳が偲ばれている。
⑤文政十年（1827）
　幕府は備前堀用水開復騒動の和解のため、代官山本大膳の手代河野啓介を派遣した。河野は関係者と熟談し、宗敏に依頼した。備前堀騒動は、天明三年（1783）浅間山大爆発で利根川の取り入れ口が埋没し、更に翌四年利根川大洪水で河床が高くなり、用水利用ができなくなり、水害を受けるのみとなった。以後、関係の村々は利害反し対立が続いていた。宗敏は農民の困窮を見かね、数年来奔走中の諸費、仲裁人手当を負担し再興土木費百両を寄附、無利息年賦で二百両貸与した。これに刺激され、義援金三百二十両集まり、貧農の負担なく復興の完成を見た。その功を讃え、弥藤吾に「備前堀復興碑」が建立された。文政十一～十二年宗敏は、備前堀修治のため計五百両を幕府に上納し、その利息をあてた。
⑥天保四～七年（1834～36）
　武蔵、上野国大恐慌の時、貧民救済のため、幕府に一万両上納しその利息をあてた。

吉田市右衛門宗敏墓

４　おわりに

宗敏の戒名は徳寿宗敏信士。一般農民と変わらない。宗敏の真髄がが戒名からも読み取れる。

（熊谷市公連だより　第８号　平成 21 年より）